

研究・調査報告書

報告書番号	担当
21	滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学
題名 (原題/訳)	
Postdisaster Course of Alcohol Use Disorders in Systematically Studied Survivors of 10 Disasters. 系統的に研究された 10 災害の生存者における災害後アルコール使用障害の経過	
執筆者	
Carol S. North, MD, MPE; Christopher L. Ringwalt, DrPH; Dana Downs, MSW; Jim Derzon, PhD; Deborah Galvin, PhD	
掲載誌 (番号又は発行年月日)	
Arch Gen Psychiatry. 2011;68(2):173-180.	
キーワード	
災害生存者、アルコール使用障害、災害後	
要 旨	
目的： いくつかの研究で災害後に飲酒が増加することは示唆されているが、災害後の飲酒増加が常にアルコール使用障害につながるか否かは未だ明らかではない。本研究では、災害前後でのアルコール使用障害有病率の関連を検証し、災害との関連でアルコール使用障害の発生を検討する。	
方法： 10 の災害について、災害後の数ヶ月以内および 1 ないし 3 年のデータを併合し検討した。対象者は 10 の災害を直接被り生存した 697 人である。The Diagnostic Interview Schedule for DSMIII-R により、アルコール濫用および依存の診断が得られる。また発症とその時期に関する質問により、アルコール使用障害の存在が災害の前か後かあるいはその両者であるかが推定できる。	
結果： 災害前のアルコール使用障害者有病率は 19%である一方、災害後急性のアルコール使用障害を発症したのは抽出対象のわずか 0.3%であった。しかしながら回復期の多くの人 (83%) がアルコールを摂取していた。また自分の感情への対処方法として飲酒していたものは 22%にも登った。災害後発症のアルコール使用障害者は、災害に関連した自己感情への対処のため飲酒する傾向が、そうでないものに比べ 4 倍ほど多く認められた(40% vs 9%)。	
結論： 災害後アルコール使用障害者のほとんどは災害以前にあったアルコール関連の問題の再燃あるいは継続である場合がほとんどである。回復期にある者、また自分の感情への対処方法として飲酒するものは、災害後の精神保健的な介入が必要な対象者であるということを示唆している。災害後の飲酒行動の変化のもたらす臨床的意義の解明については今後の研究が待たれる。	